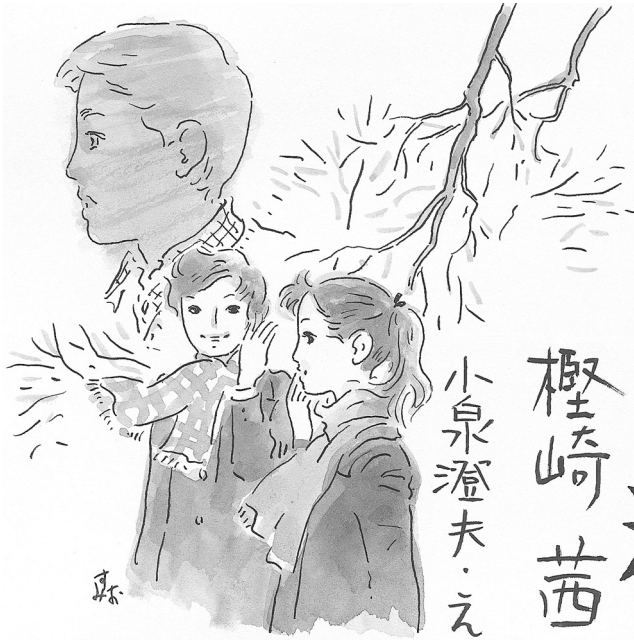


とけない氷

榎崎 茜

小泉澄夫・え



足もとの白くにごった水の中に、赤子のこぶしくらいの赤い花が閉じ込められている。

美春は「氷」というものがよくわからない。今、スケートの刃がふれているところは「氷」だが、溶けていくのもそこからだ。いくら待ったところで、核心にふれることがない。

美春が腰を上げると、水色のペンキがはげかけたプラスチックのベンチがべこっと鳴った。

冬季限定の、田んぼをやや広げたようなため池に作っているから、ある程度の時間になるまで日が差し込まない。それでも時間になれば日はあたり、決まった場所からじわり水に戻っていく。スケートができるのは、十二月から春が訪れるまでの、本当に寒い時間帯だけだ。

美春は、フィギュアスケートに比べてずいぶん長いスピードスケートの刃先をリンクに突きたてるように、コッソリと置いた。

左足で身体を支えながら、右足を靴の中で動かして紐のしまり具合をたしかめる。足を反対にすると、左も同じように確認した。

「ぼんやりしちゃって、どうしたの？」

そのとき、ひと足先にすべりはじめていた葉子が一周まわって戻ってきた。